

Title	人脈ネットワークとしての武装勢力：シエラレオネ内戦におけるカマジョー/CDFの生成と変容に関する研究
Author(s)	岡野, 英之
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/27491
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	岡野英之
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第26082号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科グローバル人間学専攻
学位論文名	人脈ネットワークとしての武装勢力 —シエラレオネ内戦におけるカマジョー/CDFの生成と変容に関する研究—
論文審査委員	(主査) 准教授 石井 正子 (副査) 教授 中村 安秀 教授 栗本 英世 同志社大学教授 峯 陽一

論文内容の要旨

問題の背景と研究課題

本研究で論じるのはシエラレオネ内戦の政府系勢力「カマジョー/CDF」である。西アフリカに位置するシエラレオネは11年にもわたる長期の内戦を経験した。この内戦は、1991年3月、反政府組織「革命統一戦線」(Revolutionary United Front: RUF)がシエラレオネ領内に侵攻したことをきっかけに始まり、2002年1月の公式的な紛争終結宣言によって終わったとされる。この内戦の犠牲者は、約7万人におよび、難民ないし避難民となった人々は260万人を超えた。

「カマジョー」(Kamajor)とは、RUFに対処するために、メンデ人(Mende)によって作られた自警組織である。チーフダム(chiefdom)と呼ばれる農村自治体を基盤として、各地で組織された。カマジョーは、それぞれのチーフダムを基盤に活動していたものの、統合・拡大を重ねた。シエラレオネ政府は、そのカマジョーを動員し、RUFとの戦いに用いた。最終的に、カマジョーは、他民族の自警組織をも統合した政府系準軍事組織「市民防衛軍」(Civil Defense Force: CDF)を形成するまでに至った。すなわち、自警組織「カマジョー」は、内戦の中でひとつの勢力へと収斂していったのである。いかにカマジョーは、CDFへと収斂していったのか。本研究は、カマジョー/CDFの変容を記述した上で、その変容に対する理解を試みる。

先行研究と分析枠組み

分析に用いたのは、人脈ネットワークという捉え方である。サブ・サハラ・アフリカ(以下「アフリカ」と表記)の政治現象や社会現象の研究では、人脈を論じる議論も多い。国家の統治や武装勢力の活動が人脈ネットワーク(縦の人脈)で機能しているとする議論もある。レノは、シエラレオネの国家が、為政者の個人的な人脈を通じて富の分配をすることで統治されているとした(Reno 1995)。彼の理解では、従属者は物理的な利益を求めて為政者に従属している。一方、武内は、レノが論ずるような富の分配による統治が破綻をしたことにより、アフリカの多くの国で内戦が勃発したと考えた(武内 2009)。すなわち、武内は、人脈ネットワークによる支配が維持できなくなった結果、内戦が生じるとした。

一方、カマジョー/CDFの変容を見ると、内戦の中で、小規模な分散した人脈ネットワーク(カマジョー)が統合を繰り返し、ひとつの勢力CDFとして形を現している。先行研究では、カマジョー/CDFの中での戦闘員の関係が、武内やレノで論じたような縦の人脈で保たれていることが指摘されている(Hoffman 2011)。この研究はカマジョー/CDFの個人間の関係(人脈)に焦点をあてて論じているが、それが組織の変容にいかなる影響を与えたのかについては論じていない。学位申請者は、カマジョーという小規模で各地に分散した人脈ネットワークがいかに統合されていくのかを分析した。

調査方法

既存の文書資料と聞き取り調査によって、カマジョー/CDFの変容を試みた。聞き取り調査では、ライフヒストリーの聴取を重ねた。それを文書資料(裁判記録、真実和解委員会によって編纂された内戦正史、NGOによる人権侵害報告)と照らし合わせることで、カマジョー/CDFの変容に対する理解を試みた。

調査では、二つのレベルで人脈ネットワークを考察している。ひとつは、組織全体を見るマクロ・レベルでの考察である。CDFやカマジョーで重要な役割を持った人物に聞き取り調査を重ねることで、CDFがいかに形成されたのかを明らかにした。このレベルでの考察は、カマジョー/CDFの変容を大枠として理解することができるが、個々の人脈ネットワークの機能は十分には把握できない。数万という戦闘員を有するからである。

その欠点を補うために、ひとりの司令官を頂点とし、彼の従属者からなる人脈ネットワークに注目した。それが二つ目のレベルである。この司令官は、CDFという大きなネットワークに接合されている一方、自らの縦の人脈のトップに立っている。彼が、いかに戦闘員を抱え、いかなる関係を上官と保ってきたかを見ることは、CDF内にある個々の人脈ネットワークの理解にも通じる。また、この司令官に従属する戦闘員にも聞き取り調査を実施した。このネットワークは、全体の一部を反映しているものと捉え、CDFがいかに機能しているのかをミクロなレベルで明らかにすることができる。

そうした二つのレベルでカマジョー/CDFという人脈ネットワークの変遷を理解しようと試みた。

考察結果

事例の細かい検討については本要旨では省略する。詳細な経緯の記述になるためである。

その考察結果は以下のとおりである。

カマジョーで重要な役割を果たした人物たちは、ローカル、ナショナル、トランスナショナル、グローバルな人脈を有しており、それらを駆使することによって活動してきた。彼らは、人脈を利用し、現状に対する打開策を模索する。その過程で、これまでは無縁であった人々が接合されていった。それを繰り返すことで、複数の人脈ネットワークは統合を重ね、CDFというひとつの人脈ネットワークとなった。CDFのリーダーとして上り詰めた者は、勢力を運営するための資源を獲得するチャンネルを維持し、それを従属者に分配することによってリーダーの立場を保った。さらに、自らを中心とした人脈ネットワークを維持するため、脅威となる人物を遠ざけ、排除しようとした。

一方、戦闘員となった人々は、小規模なネットワークが統合される中で、各地に分散するネットワークを渡り歩いた。上官を変えたり、所属するグループを変えたのである。彼らは、直接の上官のみ忠誠をつくす。彼らは、より多くの資源の分配にあやかることのできる上官を探した。CDFは政府系勢力として形を整えていったものの、その戦闘員は流動性にあふれていた。

研究の意義

この分析は、長期化する内戦の中で、いかに新しい勢力が台頭するのかを明らかにすることができる。従来の研究では、武装勢力のリーダーがいかに組織を運営しているのかの議論があった。その理解では、リーダーが獲得した資源の分配を通じて、従属者をコントロールするというものである。それに対して、本研究では、資源を有するものがいかに武装勢力のリーダー、および、幹部になるか、また、彼らがいかに組織を拡大するのかを明らかにしている。武装勢力で幹部になるものは、勢力を維持するための資源の調達チャンネルを何らかの方法で、獲得している。彼らが、それを分配することにより、人脈ネットワークは接合され、勢力が統合されていく。

論文審査の結果の要旨

本論文は、シエラレオネ内戦の政府系武装勢力「カマジョー/CDF」に焦点をあてている。1991年から激化したシエラレオネ内戦においては、反政府組織「革命統一戦線」の組織形態や戦闘の展開に関する研究蓄積はあるが、いまだに政府側の武装勢力に関する研究は少ない。そのようななか、岡野氏は2007年からおよそ5年間のあいだに、のべ200日間弱のフィールドワークを行い、「カマジョー/CDF」の幹部、および兵士にインタビュー調査を実施した。インタビューによって収集された「語り」を資料としてつみあげることにより、カマジョー/CDFの立場から、狩人組織、内戦カマジョー、カマジョー結社、CDFと、組織が段階的に政府系武装勢力へと発展してきた様子を実証的に示したことは、高く評価することができる。

本論文はまた、近年のアフリカ紛争の理論的研究にも、つぎの点から貴重な貢献をするものである。本論文は、カマジョー/CDFというひとつの武装勢力における「人脈ネットワーク」のあり方、およびその離合集散を、ネットワークの個々のメンバーに注目して共時的および通時的に明らかにした。近年のアフリカ紛争研究においては、紛争の発生原因を人脈ネットワークの分裂としてとらえ、理論を進展させてきた。例えば、その代表がポストコロニアル家産制国家論である。それに対して、本論文は、そうした人脈ネットワークが下から形成されていくことにより、紛争が激化する実態を示した。これにより本論文は、近年のアフリカ紛争研究にきわめて重要な新しい視覚を提示することに成功している。よって、本論文は博士（人間科学）の学位授与として十分価値のあるものと判断された。

ただし、本論文は次の点から、さらなる発展の可能性があることも示唆された。第一に、本論文は「カマジョー/CDF」の分析をパトロン・クライアント関係で分析しているが、本来、パトロン・クライアント関係は社会変容が激しくおこっている地域社会の社会関係の分析には適さない。本論文では、パトロンをアドホックにのりかえるクライアントの実態が描かれているが、そうであれば、従来のパトロン・クライアント関係での分析を実証研究から批判的に論じながら、理論そのものを発展させる可能性があったかもしれない。第二に、「カマジョー/CDF」には加入儀礼が大きな役割を果たすのだが、加入儀礼に関する人類学的な考察がうすいことが残念であった。人類学的手法を取り入れ、伝統的権威の変容過程や加入儀礼の位置づけを論ずれば、「カマジョー/CDF」の実態をメンデ人社会の内在的理解に位置づけてより豊かに記述することができたかもしれない。第三に、フィールドワークに際し、岡野氏は特定の「カマジョー/CDF」の幹部に調査協力をしているが、それらの協力者との緊張した関係性に関する記述が十分ではない。「語り」を資料にするうえでは、調査者と被調査者との関係性を記述にもりこむことが重要な作業であるが、この点にかんしても、今後の調査の課題として取り組むことが期待される。このように将来への研究課題は残されているが、それらを鑑みても、岡野氏が本論文によって示した分析結果が、アフリカ紛争研究、シエラレオネ内戦研究を一步前に進めたことは、立証されたといえる。